



#39

# 人に似せて形作られしモノ

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽



(また、いる……)

鬼頭弘樹は冬の冷たい雨のそば降る商店街で、下校中の足を止めた。

その視線の先にはあるのは喫茶店の前に置いてあるマネキン。

白一色の、何の変哲もない女のマネキンだ。

そんな物がなぜ喫茶店の軒先に置いてあるのか?

普通なら違和感を覚えるはずなのだが、忙しいのか、雑踏の人々は無関心にその前を通り過ぎていくだけだ。

(本当に無関心なだけなのか……)

弘樹はもう一度マネキンをちらりと一瞥する。

(それとも……あるいは見えていないのか……)

いつもの疑問を頭の中で反芻する。

そして弘樹が瞬きをした刹那。

マネキンが人間の女に変化した。

一瞬の出来事である。

さきほどまではただのマネキンだったものが、今は喫茶店の前で待ち合わせをしているOL風の女性になっている。そして雑踏の人々はやはり気づく様子もなく、忙し気に彼女の前を通り過ぎていく。

やがて彼女も淀みない動作で拳を差し、雑踏の中に紛れ、姿を消した。

(最近増えたよな……)

そう、弘樹がこの現象を見るのは初めてではなかつた。

1年ほど前に初めて目撃した時はものすごく驚いた。

自分がおかしくなつたのかと思つた。

しかしそれから1ヶ月に1人、1週間に1人、最近では2、3日に1人……と頻繁に目にするようになつていき、今では大した感慨も湧かなくなつていた。

そして下手に周りに話して、頭がおかしいと思われるのもイヤだったので、弘樹は誰にもこのことを喋つていなかつた。

(あ、そうだ。今日は6時からコズミック・ウォーズ・リブートの再放送あるんだつたつけ……早く帰ろっと)

弘樹がまた急いで家路に戻ろつとしたその瞬間。

(……！)

彼は凍りついたよう足を止めた。

なぜなら、精肉店の軒先に、自分そつくりの白いマネキンを見つけたからだ。

「あ……」

あまりの衝撃に、思わず言葉にならない空氣の塊が口から零れた。



る。

しばしの静寂。せいじやく

やがておずおずと口を開いたのは凛の方だった。

「……世の中には自分と似た人間が3人はいるつて言うでしょ?」

「ああ、ドッペルゲンガーってやつ?」

弘樹はこの前観たSF映画を思い出した。確かそのドッペルゲンガーと会つてしまふと、その人間は死んでしまう……という展開の話だった。

「あたし……あのマネキンがそれじやないかって気がするのよ……」

「まさか、そんな」

弘樹は笑い飛ばそうとしたが、凛の真剣な表情を見て気まずげに言葉を飲み込んだ。

「あのさ、この前の、竜崎歌仙のニュース知ってる?」

「ああ……」

それはちょっと前に世間をかなり騒がせたニュースだったので、普段世情に疎い弘樹でも知っていた。有名なロックミュージシャンである竜崎歌仙が自宅で変死したというニュースだ。目立った外傷はなく、ドラッグのせいだともいわれたが、当時は自殺説・他殺説入り乱れて大いにワイドショーを沸かせたものだった。

「あたし、あの人マネキン見たの……」

「！」

「あのニュースがあったのはその翌日……」

弘樹は言葉を失つた。……つてことは……。

弘樹は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

「どうしよう……」

凛は独り言のよう<sup>つぶや</sup>に呟く。

「あたし達も……死んじやうのかな……?」

「そ、そんなことないよ!」

とつさにそう応えた弘樹だったが、もちろん何の確証もなかつた。

ただそう言つておかないと自分も不安の虜になつてしまいそうで、怖かつたのだ。

「とりあえず、あのマネキンと会わなければ大丈夫なんじゃないか?」

「そうね、そうよね……きっと大丈夫だよね……」

弘樹の言葉に、凛はまるで自分を落ち着かせるように何度もそう繰り返した。

そんな凛を見守っていた弘樹は、ふと、ある重要な事実に気がつき、思わず手にしていた

コーヒーを落としそうになつた。慌てて、凛には気づかれないように、平静を装つてコーヒーを口に含む。

あいつは……。

あいつは凛と俺のど、ちの、マネキンなんだ？

弘樹は困惑した。

精肉店の前で例のマネキンを目撃したとき、自分と同じ顔だという衝撃のせいで、奴の衣服までは良く観察していなかつた。

ただスカートなどではなく、男でも、女でも、どちらでも通用するようなラフな格好をしていたような気がする。

あれがもし凛のマネキンであるならば、自分は助かる……ということになるのだろうか？ いずれにせよ、マネキンがどこに行つたか判らない今、それは確認のしようがないことだつた。

「でも、会わないようにするつて言つても、一体どうすればいいのかしら……？」

「それは……」

弘樹は言葉に詰まつた。  
確かにマネキンがどこにいるか判らない以上、こちらからはどうすることもできない。

待ち伏せでもされれば、それで一巻の終わりだろう。

いや、待て。

考えるんだ。

考えれば、きっと何か……。

「コーヒ－のお代わりはいかがですか？」

思考の海に沈んだ弘樹を、ウエイトレスの明るい声が現実に引き戻す。

「あ、俺はまだいい……」

言い終わらないうちに、弘樹の向かいからゴトッと鈍い、嫌な音が響いた。

見ると凛がテーブルに突つ伏して、ぴくりとも動かなくなつていて。

その目からは生気が失われ、肌も血の気がなくなつていた。

そう、まるでマネキンのようにな。

「あら？ お客様？ どうされました、お客様？」

ウエイトレスが心配そうに凛に声をかける。

「！」

弘樹は思わず身を引いた。

ウエイトレスの顔が凛そっくりだつたからだ。

（こいつが……さつきのマネキン……つてことは、俺じゃなくて彼女の……）

弘樹は突然の出来事にどうすればいいのか判らず、パニックに陥りかけていた。

（落ち着け、落ち着くんだ。とりあえず、俺の命の危険はなくなつた。だけど、このウエイト

レス、マネキンだ。マネキンなんだろう？　じゃあ、俺は一体どうすれば……警察？　いや、先に救急車か？　ああ、でも一体誰がこんな話を信じてくれるつて言うんだ……？）「店長ー！　ちょっと来てもらえますかー！？　具合の悪くなつたお客様がいるようなんですけどー！」

弘樹の恐怖に満ちた視線に気がつくことなく、ウエイトレスは厨房ちゅうぼうに向かつて大きな声で呼びかける。

「どうした、一体何の騒ぎだつていうんだい？　あ、キミ、この書類、事務所に戻しておいて」

た。

近くにいたウエイターにそう指示を飛ばすと、店長おはと思しき男が足早にこちらに向かつてき

た。そしてその店長は——弘樹そつくりの顔をしていたのだった。

おしまい